

『するが有度山麓9条の会』NEWS

劫火の中になお生命ありて⑤

明泉寺14世住職 故水谷光子

空襲が激しくなるにつれて、人々は真剣に生を見つめ、死を考えるようになっていた。『生きるも死ぬも家族一緒に…』という考え方が、当時の一般的だったし、私達もそう考えていた。しかし各地に空襲が激しくなり、一つ壕の中で、家族全員即死という、悲しいケースが目立つようになると、家系を絶やさぬ為に、危険を分散する必要も、論じられるようになった。家族が『父と娘』『母と息子』というように、二組に別れて、別の壕に入るとか、別の方向に逃げるという話も身近に聞いた。親達が真剣にこんな話をする時、親の悲しみもさることながら、その決定に従うしかなかった子供達は、定めし小さな胸を、



切り裂かれる思いだったであろう。でもこういう相談ならまだよい。いざと言う時は、病人や老人を捨てて、身軽に逃げようという話も聞いた。事実「蒸し芋を持たせて、姑を置き去りにした時の、あの縋るような目付きが忘れられない」という嫁の体験も聞かされたことがある。「でもお陰で、幼児三人は助けられたし、自分も生き延びられた」と。真にこんな惨酷が許されてよいだろうか。けれども、これを批判できる人間も、またいない筈だ。極限状況に追い込まれた人間の言動を、平和な状況にあつて、他人事として眺める事は、まさに傲慢であろう。夫を戦地に出征させ、働きつつ老人を看取り、子育てをしていた銃後の婦人の肩の荷は、かくも重かったのである。私自身、その場に立たされたら、何ができただろう。この女性の懺悔を後日聞いた時、余りの衝撃に背筋が寒くなり、ガタガタと暫くは震えが止まらなかつた事を忘れられない。見渡す限りの焼け野原に立って、配給物資を貰うために並んでいた時に、小耳に挟んだ懺悔であった。夫は無事に復員できたのか。事実を夫に報告できただろうか。半世紀経つても、未だに気になつてゐる。いづれにしても、彼女は終生、負い目を抱いて生きていたのであろうし、姑も嫁も共に何とも気の毒な話である。戦争のもたらす悲劇は、戦場に銃後に、枚挙のいとまがない。正常な人間が狂人になるのだ。狂わなければ人は殺せない筈だ。

女の身、銃後しか見ていないが、戦地での戦闘・掠奪・虐待と想像するだけに、震えが止まらなくなる。そして、必ずしも本人のみの責任として、片付けられない問題を持つてゐる。

当時の私達世代は、戦争をどう考えていたのか。男子の学生の多くは、優秀な能力も旺盛な向学心も押し潰し学業半ばに、ペンを捨てて銃を取った。戦



争末期には、国の遠い将来を展望するゆとりはなく、今直ちにお国に役立つべく、身を投げ出すことを求められた。前線で戦闘力となり、銃後で生産力となるべく、男も女も老いも若きも、一丸となって、心身をすり減らして、ひたすら働いた。そのように教育され、純粋に信じて挺身していた。自身で考えるよりも、目上の方の心をよみ、命令される前に、意図されているように、

気配りし行動するように、育てられていたのである。他人事ではない。私自身も僅かな期間ながら、教える側にも立っていた。たまたま、女生徒だけの学校だったが、男子校の先生だったら、生徒を軍関係の学校に志願させるよう、仕向けるように踊らされたかも…。敗戦を機に、日本は民主主義の世になった。各国の歴史に見るように、勝ち取る努力もせず、戦勝国・アメリカから与えられたのであった。そして、当時の為政者の意のままに、目を塞がれ動かされていた、自身の愚かさにはつきり気付かされた。教育が一度方向を誤ると、まさに『ハメルンの笛吹き男』の話のように、催眠をかけられたようなものだった。思い出すだけでも身の毛がよだつ。

戦争で生命を失った人々は、敵味方とも数え切れない。自ら進んで散華した人々の生命が、つくづく憶わせられる。やり残した学問や研究・仕事への情熱。父母・妻子・兄弟姉妹・婚約者・友人達への愛の絆。潔く捨てた者も、未練を残して逝った者も、断腸の思いに変わりはなかつただろう。遺された者のその後の人生も、思い巡らすだけで限りなく切ない。老いている父母・未亡人を通して妻・許婚者を失って独身のままにいる方。私の身近にも何人もいられる。この方々には、戦争は未だに終わっていない。

劫火の中を生かされた私にとって、生命は授ったものという思いが強い。使

命感を覚えさせられている。限りある生命だからこそ、燻るのではなく、十分の酸素を得て、完全燃焼させ、最期まで明るく燃え続けていきたい。自身の生命が大切だから、同様に他人の生命も大切にしたい。更に生きとし生ける総ての生命も、できるだけ大切に…と考える。大自然の恵みに包まれ、自然を愛しみ育て、自然と文化の調和した社会の中に生きたいと思う。家族・親戚・



近隣・友人が幸せであつてこそ、私も幸せでいられる。国と国の関係もまた同じである。主張すべきは大いに主張すればよい。しかしその解決は決して武力に訴えることなく、あくまで話し合い、理解し合うことに、総力を結集して努力したい。日本のみの繁栄は全く考えられない。また世界の孤児になることを、国民は決して望まない筈である。このことこそが、戦争体験世代の私から、若い世代への贈るメッセージである。

戦後の国民の涙ぐましい努力によって、現在の日本は未曾有の豊かさの中にある。しかし、精神的にはどうであろうか。未来の社会を背負っていくべき青少年・児童・幼児はどう育っているか。高齢者は不安なく暮らしているだろうか。環境問題に将来の不安はないか。

総ての人間が、生まれるべくして生まれた生命を、生かされて生きるなら、総ての人が、目を輝かせて生きていける社会でありたい。私自身に与えられた日々は、もう余り多くは残されていないだろうが、それ故にこそ、最期の日まで、ノーマライゼーションの世に向けて、充実した完全燃焼の日々でありたいと念願してやまないのである。

あとがき

思い起こせば、私がこの戦争体験記を書いたのは、富士川町の友人・望月富子様からのご依頼によるもの。そして富士川町・婦人会・文化部から、『戦前・戦後を生きぬいてきた、母たちの記録集・第三号』として、昭和六十一年三月に発刊された。『国連婦人十年』という意識も私にあり、『思い出すのが辛い：書くのが辛い：』などと、自らに甘えてばかりいないで、散華するしかなかった、数え切れない生命に対しても、生き残った者の、せめてもの義務として、書き残す気になり、ペンをとったのであった。当時の事、手書きのものをコピーして、係りの方が手作りされた、貴重な文集であった。その後、ごく内輪の人々に、私の体験記を贈った。

平成六年六月の戦災五十回忌には、この体験記に少し加筆して、親戚・檀信徒・友人などに配った。かなり広範囲の方にお読み戴けたようで、沢山の反響があった。殊に、小・中学校の先生方から、社会科の授業に使用したいからと本を請われたのであった。朝日新聞（大阪）の記者の訪問も受けたし、中学生もよくグループでやってきた。静岡市の戦災記録品を収集して、常設展示するからと、有志の方々がその資料の一つにと、持って行かれた事もあった。

平成七年六月には、『終戦満五十年の特集記事』として、読売新聞・静岡版に、大きく取り上げて戴いた。沼津・真楽寺ご住職首め、沢山の方々から、ご感想や激励を戴いた。平成八年三月には、『私の戦争体験』が、『日本女子大学・家政学部・児童学科・縦の会』から発刊され、載せて戴いた。（戦時下の生活）（学徒動員）（空襲）（疎開）（引き揚げ）と、敗戦時に、四歳から二十三歳だった童女から乙女たちの手記を集めたものである。

平成十年四月十三日には、この本のご縁で招かれて、東京・南池袋公園の碑の前で、根津山防空壕一帯で散華された、七百七十八名の追悼会を、お勤めさせて頂いた。戦争体験者は、近年とみに減少している。次の世代に是非伝えたいが、それには、タイムミングが必要であろう。『知りたいと思った時に、読んで貰えるように、その為には、書き残すしかないのでは…』と考え、皆様にもお勧めしているのである。

今回で連載、「劫火の中になお生命ありて」明泉寺・水谷光子手記を完了しました。ご覧いただきありがとうございます。

紫陽花

梅雨のきて庭の紫陽花瑞々しその当たり前に蘇るもの
 戦災の劫火の中を生き伸びぬ賜ひし余生は早や半世紀
 道ひとつ隔てて災禍を免れし農家の庭に紫陽花の花
 罹災四日後燻り続くる街を抜け紫陽花に遇ひて目を覚まされき
 生くる希望かきたてられき瑞々と咲く紫陽花の生命に触れて
 生かさる身のありがたしこの年もかの日のままに紫陽花の咲く

戦知らぬ世代へ遺すメッセージ生ある裡にと重き筆とる
 気力残る裡にと辛き筆をとる書きゆく程に血潮の騒ぐ
 半世紀経ちても癒えぬ傷のあと触るれば痛み鋭く走る

